



豊富な石橋保存事例を見聞 2014(平成26)年度第35回大会 熊本県山鹿市で開催



熊本県山鹿市の田中橋(化巖缸・車橋)
写真提供/坂本重義(2014年5月11日撮影)

第35回日本の石橋を守る会総会・大会が2014(平成26)年5月10~11日の2日間、熊本県山鹿市の山鹿温泉富士ホテルで開催され、38人の会員が参加した。

1日目は通常総会が行われ、地元の上妻信寛・景観保護部長を議長に選出し議事が進行。昨年度の事業経過報告、決算・監査報告に続き、本年度の事業計画と予算案が発表され、了承された。

現在、東京の日本銀行本店前の「常磐橋」は、東日本大震災により被災したため解体修理が進められている。そこで今回の大会では、文化財建造物修理の設計監理に関する技術指導を専門的に行う、(株)文化財保存計画協会(東京都千代田区)の研究員、西村祐人氏を講師に迎え、「東日本大震災による『常磐橋』被災の調査復旧について」と題した記念講演などが行われた。

晴天に恵まれた2日目は、山鹿市立博物館で開催中の「石橋特別展」を見学。その後、山鹿市内各地の石橋を巡った。

同博物館前の「大坪橋」、山鹿市杉の「日輪寺」境内の「湯町川(湯町)橋」では、両石橋の移設保存に携わった中村幸史郎会員(熊本県)が移設当時のさまざまな工・ピソ―

ドを披露。河川改修により石橋を撤去したものの洪水はその後も起こったこと、石橋を解体・移設し、完全に元通り復元することの難しさなどを語った。

「田中橋」たんなかばし(化巖缸)川げごんこう・車橋)では、森山良雄会員(熊本県)が撤去に反対した経緯、文化庁に陳情し、13年間かかって現地保存が実現したことを話した。

最後に訪れた「高井川橋」で今回の大会は閉会し、会員一行は解散した。



第35回山鹿大会プログラム

【1日目(5月10日)】

開会挨拶 副会長 末永暢雄

主催者挨拶 会長 甲斐利幸

来賓挨拶 山鹿市長 中嶋憲正

来賓 山鹿市教育委員会教育部長

木村厚男▽山鹿市議会副議長

吉本政幸▽鹿本地域振興局次

長 西川哲治

記念講演

「東日本大震災による『常磐橋』被災の調査復旧について」

講師 西村祐人

(株)文化財保存計画協会

【2日目(5月11日)】

山鹿市立博物館「石橋特別展」見学

山鹿市内石橋巡り

(2・3面に関連記事)

中面の案内

2面 東京・常磐橋を解体修理

5面 石橋の設計・維持ガイドライン

4面 石橋発見報告(費田岳和)・平山橋移設(河村修)

6面 石橋を守るために(1)(軸丸英顕)

記念講演 「東日本大震災による『常磐橋』

被災の調査復旧について」

講師 (株)文化財保存計画協会 研究員 西村祐人氏

「常磐橋」は文明開化の時期、帝都東京に築造された。先の関東大震災に続き3年前の東日本大震災でも被災し、現在は大規模な修理が進められている。今年5月開催の山鹿大会では、同橋の調査・復旧作業を進める(株)文化財保存計画協会の研究員、西村祐人氏から直接話を聞くことができた。

記念講演で西村氏は、常磐橋の概要、東日本大震災による被災状況と現在の修理工事の状況を紹介し、その文化財としての価値について説明した。

写真提供／上塚寿朗(*a)、坂本重義(*b)



西村 祐人氏(*a)

近代都市の在り方を知る宝 西村氏

速道環状線がふさいでいます。

2度目の大震災による損傷

2011(平成23)年3月に起きた東日本大震災で常磐橋は損傷を受けました。そこで千代田区が事業者となり、間もなく、常磐橋の震災被害診断調査が行われ、修理事業計画が始まりました。

常磐橋はアーチにゆがみが生じ、輪石に亀裂が入り一部が突出、壁石にはらみ出しが見られ、路面の一部が陥没、勾欄(こうらん)がずれ、親柱の表面がはく離している箇所がありました。そのため応急処置として、石材落下防止ネットが張られました。



常磐橋の路面敷石の下にはコンクリートの層が出現。関東大震災時の修復と見られる。奥に見えるアーチ橋は昭和10年に架設された鉄筋コンクリート工法の「常盤橋」=今年2月撮影(*a)



常磐橋の壁石の各石材には番号が振られ、復旧工事の際、上下左右の石材の接合位置が分かるよう朱の墨が引かれている。上塚尚孝事務局長(左)に説明をする文化財保存計画協会の西村祐人氏(右)=今年2月撮影(*a)



築造当初の常磐橋の画像(石黒敬章氏提供)なども紹介された(*b)

「常磐橋」は、東京都中央区日本橋本石町の日本銀行本店(日銀)前の日本橋川に架かっています。常盤橋公園のある対岸は千代田区の区域。架橋は1877(明治10)年、橋長28・8m、橋幅12・6mの2連アーチ橋です。

文明開化の時期に架橋

ここは、かつて江戸城の外堀に位置し、常盤橋見附と大手門に至る常盤橋門がありました。門前に木橋が架けられていましたが、明治初期の文明開化の時期に「萬世橋」「鍛冶橋」などとともに、常磐橋も当時の東京府により石橋に架け替えられました。

山鹿市の石橋を見学

大会2日目は山鹿市に残る江戸期から明治期に築造された石橋を見学
写真提供/坂本義重(*b)、中村まさあき(*c)



大坪橋=山鹿市立博物館前に移設保存(*c)



湯町川(湯町)橋=日輪寺境内に移設保存(*c)



日渡洞口橋=菊鹿町に移設保存(*b)



田中橋=鹿北町(*c)



高井川橋=鹿北町(*c)

翌12年度は専門家による検討委員会が発足。支保工を設置し、常磐橋のアーチを解体して修理することになり、併せて史料調査やボーリング調査を行いました。支保工設置の影響で大雨の際、常磐橋の上流で洪水の危険が増すため、護岸のかさ上げ工事も行われました。

13年度から第1期解体工事が始まり、専門家の意見を踏まえ、勾欄、路面、輪石の直上まで壁石の解体が進みました。

本年度から来年度にかけては、輪石を全て取り、支保工を外して、アーチ基部の根石を出した状態まで解体する計画です。その後は根石の変位状態を確認し、基礎の修理方針の検討を行います。

修理には極力旧材を使用

常磐橋は単に解体・修理するのではなく、築造当時どいつた工法が使われたのか、後の時代にどのような改修が行われたのか、材料や仕上げ方法は何かなどの調査も進めています。

解体修理では、劣化の激しい石材を取り替えなければなりません。調査によると石材全体のおよそ4割に劣化が確認され、取り替えが必要な石材が発生する可能性があります。

復元の場合は別ですが、文化財の修理の場合には一般的に、全体の3割を超える部分が新しくなると、それは元のものとは異なるものに見えてしまいます。なるべく使える石材は、「つぐ」「はぐ」などにより、旧材を再利用するように心掛けています。

石橋に限らず、文化財を修理する場合は、まず保存すべき価値とは何かを明確

にする必要があります。その価値が明らかでないと、修理の方針も決まらず、補助も得られません。

和洋折衷の技法が特色

史料調査や解体調査を通じて見えてきた常磐橋の歴史的価値は、日本の近代都市基盤整備の在り方を理解する上で大変参考となる事例だということです。

明治初期の文明開化期、変化する交通需要や防火の面からも、近代都市にふさわしいとして石橋が採用されました。そして近代都市を象徴する建築物や要所のそば、ビジネス街の中心地などに石橋が架けられました。明治期の東京にはかつて、常磐橋を含め少なくとも、15基の石橋が架けられました。

文明開化初期の石橋は、江戸期以来の

伝統的な石積み技法や石橋構築技術を基盤に、西洋からの技術も取り入れた和洋折衷の技法が特色です。

「八重巻石」といわれる壁石は、「萬世橋」(明治6年、一部は扇積み)、「京橋」(同8年)、「江戸橋」(同8年)、常磐橋(同10年)にも見られます。極めて装飾性に富んだ「皇居正門橋」(同20年)や「日本橋」(同44年)は、文明開化初期の石橋とは特徴が異なります。

常磐橋は他の石橋が撤去や架け替えの運命をたどる中、保存運動等によりこれまで、意図的に残されてきた貴重な石橋です。また、文明開化初期に築造された石橋群の中で唯一現存し、現在も使用されている石橋としては、都内で最古(庭園内の石橋を除く)という点にも価値があります。

石橋探索の旅

写真提供／費田岳和

会員 費田岳和(宮崎県)

各地を巡り、まだ知られていない石橋、埋もれた石橋を見つけて続ける費田岳和会員(宮崎県)。昨年4月開催の日南大会以降、今年7月までに3基の石橋を発見した。各橋を費田氏のコメントとともに紹介する。

輪石 13列

「峠路(とうげじ)の田の神を探して、山の中までやってきました。さすがに山奥に田の神はない。さて、こちらでUターンしようと思いい、枝道の下をのぞくと、なんと輪石が確認できました。田の神(たのかん)さあーに感謝です。この橋が架かる川に沿って薩摩街道が伸びています」

峠路の石橋(仮称)

所在地 鹿児島県薩摩川内市湯田町峠路

橋幅 1・8メートル
径間 1・82メートル
拱矢 1・0メートル
環厚 33センチ

平田橋

所在地 鹿児島県南九州市知覧町永里樋与上(山仁田川)



平田橋

ながらの石橋探索でしたが、その途中で遭遇した大きな見つけものでした」

滝の内の石橋(仮称)

所在地 宮崎県西臼杵郡日之影町七折滝の内

橋幅 1・0メートル
径間 0・8メートル
環厚 27センチ



滝の内の石橋(仮称)

「宮崎県の北部は昔から庚申信仰が深く根付いている土地柄です。以前に比べ石橋の新発見が極端に少なくなっているため、最近

田川

架橋 1936(昭和11)

年5月
橋幅 1・96メートル
径間 3・5メートル
拱矢 1・8メートル
環厚 36センチ
輪石 19列

「石橋発見に何が大事かといえ、通ったことのない道をいかに通るかに懸かっています。今回も田の神を探し

は回っていても面白くないのですが、そんなとき楽しみなのは、青面金剛像などの庚申信仰に関する石造物や仁王像を探すとです。カーナビに登録されていない道路を進むと、水路をまたぎました。水路を上流側にたどっていくと石造アーチ橋が出現。石橋の水路をたどると槇峰発電所に出るので、その導水路でしよ」



平山橋の石材＝山鹿市立博物館内
写真提供／中村まさあき

平山橋 熊本県山鹿市 河川公園への移設決まる

会員 河村 修(熊本県)

熊本県山鹿市の平山温泉街にあった「平山橋」は今年8月4日、元の位置に近い河川公園への移設が決定した。市単独財源で予算化され、10月に移設工事に着工、12月に現地で見学会を行い、来年3月完成を目指す。

豪雨による浸水被害の危険を避けるため同橋は、保存する方向で2012年に解体・撤去され、石材が山鹿市立博物館内に保管されていた。河道から平坦な公園への移設となるため、移設後の壁石は下から6段目までとなり、その上は輪石のみの姿となる。

同橋は1861(文久元)年に築造され、1914(大正3)年に拡幅のため隣に同規模の石橋が架けられた。今回の移設は文久元年架設部分のみが対象。今後は地域おこしへの活用を図ることが重要になる。

設計ガイドライン

石橋の設計ガイドラインは、設計の基本として、「石造アーチ橋の特性を適切に評価できる解析理論および解析モデルを用いなければならない」とし、耐震設計についても明記している。

使用石材は、強度、変形性能、耐久性の面で品質が確かなものを確保する必要がある。そのために、「必要に応じて、岩石の密度、一軸圧縮強度、圧裂による岩石の引っ張り強さ、岩石のスレーキング試験（凍害や乾湿の繰り返し）の影響試験」などの岩石試験を実施し、耐久性を確認しておく必要がある」としている。

「石材は原則として、最低設計基準強度を無筋コンクリート部材相当以上のものを用いる」とし、使用石材の圧縮・曲げ引っ張り・支圧応力度の許容応力度について数値を示し定めている。

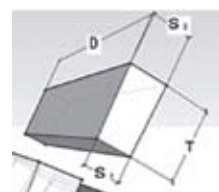
石材のサイズについても、輪石厚の式をはじめ、各種石材の推奨値を記載している。

石材の連結方法はさまざまあるが、輪石と壁石については、石材表面の摩擦のみで接合する「空積（からづみ）」を原則としている。

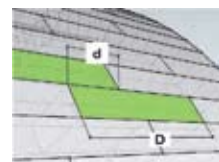
その他、石橋新設に関する施工計画にも触れ、支保工の組み立てや解体、復元のための施工管理方法などについても紹介している。

石橋の設計ガイドラインと維持管理ガイドライン

土木の技術向上を目指し、産・官・学が連携して学術的な交流活動を行う、一般社団法人九州橋梁構造工学研究会(福岡市中央区渡辺通、牧角龍憲会長)、通称「KABSE(カブセ)」は今年6月、新たな石橋構築と石橋の保存に向け、「石橋の設計ガイドラインと維持管理ガイドライン」をまとめた。この活動には、熊本大学大学院自然科学研究科の山尾敏孝教授(会員)、尾上建設(株)の尾上一哉氏(会員)、(株)建設プロジェクトセンターの中村秀樹氏(会員)が携わっている。内容の一部を紹介する。



輪石単体の形状



輪石のラップ長



壁石の控え長と合端(あいば)加工

損傷の種類

石材

- 01 ひびわれ
- 02 断面欠損
- 03 輪石のずれ・開き(空洞)
- 04 抜け落ち
- 05 壁石箇所の形状・ふくらみ
- 06 敷石のひびわれ
- 07 アーチ・法線形の形状

鋼材・コンクリート・その他

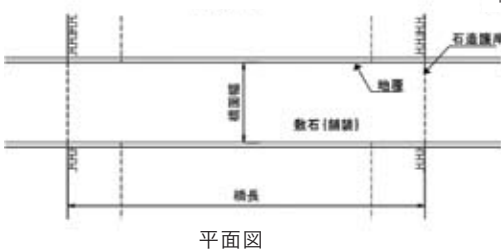
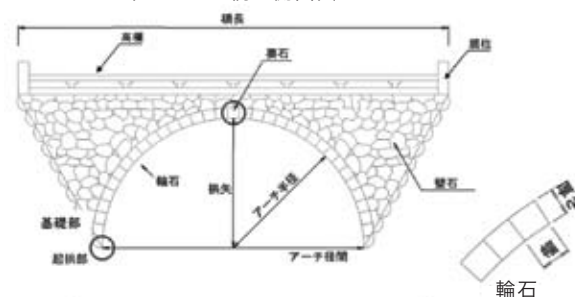
- 08 腐食
- 09 ゆるみ・脱落
- 10 はく離・鉄筋露出
- 11 漏水・遊離石灰
- 12 うき
- 13 コンクリート補強材の損傷
- 14 床版ひびわれ
- 15 路面の凹凸
- 16 舗装のひびわれ

共通

- 17 変色・劣化
- 18 漏水・滞水
- 19 異常な音・振動
- 20 異常なたわみ
- 21 変形・欠損
- 22 土砂詰まり
- 23 沈下・移動・傾斜
- 24 洗掘
- 25 通水断面の状態

※「石橋の設計ガイドラインと維持ガイドライン」九州構造・橋梁工学研究会発行より引用

単一アーチ橋の側面図



平面図

KABSE 講習会

日時 10月17日(金) 13~17時

場所 熊本大学くすのき会館
熊本市中央区黒髪(黒髪北キャンパス)

参加費 6000円(非会員・テキスト代含む)

申込締切 10月10日(必着)

(問)092-737-8570(KABSE 事務局)

維持管理ガイドライン

石橋の維持管理ガイドラインは、道路維持管理の一貫として主に道路橋を対象に、その点検・調査方法、補修・補強方法を紹介している。

点検は、道路パトロールによる路面の通常点検、遠望目視による一次点検(定期点検)、近接目視による二次点検(定期点検)、異常時点検などに分類されている。

点検で石橋の各部材の損傷状況を確認し、点検調査に記入。写真撮影を行い、近接目視が可能な場合は、損傷位置などをチョークで表示する。

上の表は材料ごとに分けた損傷の種類であるが、さらにその種類ごとに、「01 ひびわれ」の例では、A 損傷なし、B 部分的にひびわれが見られる、C 広範囲にひびわれが見られる—などの区分で損傷度の評価を行う。

また維持管理ガイドラインでは、点検の手順も示されている。まず石橋に関する資料の収集、石橋の一次点検を行い、必要に応じ二次点検や詳細調査を実施し、各自自治体の文化課や教育委員会、有識者などと協議を行い、再調査の必要性について点検調査をまとめ、専門家からのアドバイスを得ながら、対象石橋の文化・地域資源的な価値について、総合的評価と対策方針の選定を行うよう求められている。

石橋を守るために(1)

会員 軸丸 英顕 (熊本県)

写真提供/軸丸英顕

物には必ず寿命があります。石橋にも数百年の長寿を保つものがある一方で、「自然の猛威」のために短命に終わるものもあります。残念なのは、「社会の声」を受けて、撤去・廃棄されていく石橋が数多くあることです。そこで、これから数回にわたり、石橋の存在を脅かす「社会の声」に対して、どうすれば石橋が天寿を全うできるのかを考えてみたいと思います。



写真1 諫早眼鏡橋(長崎県諫早市)。洪水対策のため撤去され、諫早公園に移設・保存

石橋を脅かす「社会の声」

石橋の存在を脅かす「社会の声」には、次の2つがあります。

洪水の防止を望む声

1つ目は、川の流れを良くするなど洪水を防ぐ対策を望む声です。これは安全な社会をつくることも重要な取り組みであるため、流れを妨げる石橋は撤去が検討されることとなります。

1957(昭和32)年の洪水後に撤去・移設された諫早眼鏡橋(写真1)の場合、石材がダボと呼ばれる鉄片で連結されたとても頑丈な構造でした。このため増加した川の水を受けても壊れず、洪水被害が拡大する原因になつたとされました。加えて、再び被災しないために川幅を広げることにになり、眼鏡橋を元の位置に残すことはできないと判断されました。

円滑な交通を望む声

2つ目は、通りにくい橋を改良し、円滑に通行できることを望む声です。石橋には、車の大型化など建設時には想定できなかった状況のため、もともとの幅や勾配、強度のままでは通行しにくくなったものがあります。拡幅や補強などを行って改善するには多額の費用が必要になるため、経済的な方法として、新しい橋への架け替えが検討されることになるのです。

鹿児島市の甲突川石橋群(西田橋など3橋)は、1993(平成5)年の

水害後、「川の流れを阻害」しているとして撤去移転(写真2)されました。しかし、この石橋群は、新しい道路網整備に不要だ

として、戦災復興の時代から何度も撤去の提案がされてきた経緯があります。「洪水」は単に撤去の引き金になつただけのように思えます。貴重な石橋群が「通行の妨げ」を理由に撤去されたとする

ばとても残念です。

石橋を守る工夫

地球温暖化の進行や流域の開発などによって川の流量は増加しており、河川改修の必要性が高まっていることは事実です。ただ、「水を流す」という川の性能を高める方法は、石橋を撤去



写真2 西田橋(鹿児島市)。洪水対策のために撤去され、石橋記念公園に移設・保存



写真3 下鶴橋(熊本県上益城郡御船町)バイパス整備により現位置に保存

し川幅を広げること以外にもあります。遊水地やダムを設けて水を一時貯め徐々に流す方法や、河川バイパスを造って増えた水を分けて流す方法などです。これらをつまく活用できれば、石橋を現位置に残すことが可能になることもあります。

円滑な通行のための対策は、地方部と都市部で大きく異なります。地方部では、下鶴橋(写真3)のように、石橋を残し道路と新橋をバイパスとして整備するケースが多くみられます。一方、都市部では石橋を避けて道路を整備できるケースは少なく、拡幅などを行って石橋を通行しやすくするか架け替えを行うかの選択になります。費用比較の結果、現実にはほとんどの場合、架け替えが選択されています。ぜひ、石橋の価値も評価に加えて適切な対策検討を行ってほしいものです。

次回からは、現位置での保存を実現できた事例を技術的側面に焦点を当て、紹介してみたいと思います。

目を養い、手を練る

「午前中に通潤橋を見てきました」と、某雑誌社の記者が石匠館を訪れた。取材後、「通潤橋の石垣を築くときに種山石工たちは、熊本城の石垣を研究させてもらったと聞いたもので、これからお城の石垣を見学に行きます」と記者。

熊本城へ行って石垣を見学するのはいいけれど、おびただしい数の石垣を前にして、どこを見たらいいのか迷うに違いない、お城の案内人に尋ねても明確な答えは得られないだろう。

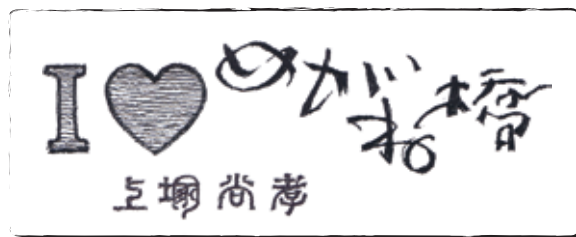
そこで私は、石垣のイラストをコピーして記者に渡した。宇土橋前の広場から見て、右の大天守と左の小天守を支える石垣台の隅角稜線部の石積み私を描いたものだ。

大天守下の隅角稜線部は、加藤清正が築造したころのものだろう。穴太(あのう)石工の指導により、大きめの石材を積み上げてある。それに比べると、小天守を支える石垣の方は、長石材を左右交互に積んだ算木(さんぎ)積み工法で、規則正しく上方へ繰り出されている。

以前、その違いをお城の案内人に質問したところ、「小天守は大天守築造後に造られたと聞いています」としか返答がなかった。

隅角稜線部の石積み工法の違いは、大天守南の石段を降りた先にある二様の石

垣で大略が分かる。熊本城の城主は加藤清正の死後、2代忠広の代で改易になり細川家に替わっているが、熊本市文化財専門相談員の富田紘一氏の著書には、「城内の石垣造りは6期に分かれる」と記してあった記憶がある。九州文化財研究所の花岡興史氏の著書には、「文禄・慶長期には、穴太積みによる技



術発展は終わり、高石垣志向が見られ、算木積みが完成される」とある。また、「勾配先端最上部に反りが発達し、元和・寛政期には曲線を描く石垣が完成した」。

通潤橋の鞞石垣を見ると、たこ糸を緩く垂らしたように上へ伸びた稜線部は算

木積みである。種山石工衆が「熊本城の石垣を参考にした」時代は、穴太の技術を持った職人はもういなかったはずであるから、種山石工衆は2代忠広時代に築かれた5期(小天守や飯田丸以降の石垣を参考にしたと考えて間違いないだろう。来館した記者にもそう伝えた。

ちなみに、種山石工衆が研究対象に

した石垣は、隅角稜線部だけであるまい。例えば、石垣台の面を構成する基底石材は、地面に斜角に埋められているし、その角度は上になるに従って水平になる。壁面の傾斜は上部で垂直となり、ついに反って、「武者返し」と呼ばれる曲線を描く。これは城造りの高さ志向と防衛意識の表れかもしれないが、通潤橋にはいくつもその石垣造りの技術が生かされている。

ついでながら、熊本城の石垣は雑割石の間に小石を挟む「打ち込み接(はぎ)」といわれる工法。これは職人技と呼ばれるが、築城ブーム到来とともに多人数の職人が必要となり、石材の量産を図るため、規格化した間知石(けんちいし)を使うようになり、「切り込み接ぎ」といわれる工法が登場する。身近なめがね橋の例では、文政年間末期の馬門橋、小荏橋、二俣橋(ともに美里町)の壁石が前者の工法、通潤橋は後者の工法だろう。鹿児島



熊本城の算木積みみの石垣 イラスト/上塚尚孝

市の西田橋の壁石表面の仕上げは、切り込み接ぎの頂点を極めた感がある。

近年の石垣工事などで使用される間知石は、控えが短く、しかも尻細型で、四角錐の頂点を切った形をしている。しかし、江戸末期の間知石は同じ規格品でもサイズ・形状が大きく異なる。表面は400〜500mmあり、控えが長い。霊台橋(美里町)の修復をした石工の竹部光春氏によると、控えは90〜100mmもある直方体の石材が使われているという。そんな石材を積み重ねたから築造から160年を超えても異常がない。

私はかつて、鹿児島県会員の木原安妹子さんに案内してもらい、岩永三五郎が宮ヶ浜(鹿児島県指宿市)に築いた堤防を見学したが、これは直方体石材の積み重ねだった。もちろん今も健在である。

築400年の熊本城を約160年前に研究対象とした種山石工衆は、石垣の表面構造を見学すると同時に、内部構造にも着目したことだろう。袖石垣の算木積みはもとより、壁面の布積み、扇積み(1世紀半を過ぎても維持され続けている)。

通潤橋は、伝統工法の偉大さを再認識させながら、「丈夫さ」「実用性」「姿形的美しさ」の三拍子がそろい、今年も白糸台地118畝を潤し、稲を育て、人を育てる。

(2014年7月7日)



上塚 尚孝「鶴下村中橋」
熊本県八代市東陽町

石橋の文化

鶴の三橋を描いた日は、強い川風を予想して風門と丹田にホカロンを貼って、風邪引かぬよう万全を期した。

鶴下村中橋を描いているとき、思いがけずおばあさんが登場。橋の上でひと休み。その杖ついたポーズと位置がお見事で、そのままモデルになっていた。2001年作品、ペン画、文。上塚尚孝「史実資料に基づく種山石工列伝」より

福岡八女市で開催 「石の文化に学ぼう」

地元の石橋の魅力子どもたちに伝えようと、「石の文化に学ぼう」と題した体験イベントが7月21日、福岡県八女市上陽町の「ほたると石橋の館」ほかで開催された。

積み木を使った「ミニ石橋づくり」で子どもたちは、アーチの構造とその強さを実感したよつだ。



ミニ石橋づくり
写真提供/久間政幸

編集後記

本号では数々の石橋の修復や保存に関する情報を伝えました。第35回大会の記念講演で講師の西村祐人氏が語った、「石橋の保存すべき価値を明らかにすることから修理も保存もスタートする」という視点は、大変重要だと思えます。

豪雨被害を受けた福岡・八女市の「宮ヶ原橋」の現地保存決定については、その背景に、住民の方々が普段から、地元の石橋の価値を共有する努力を続けてこられたことも大きいと思われまます。

保存には移設の方法もありますが、移設先は元の地形とは常に異なるため、完全な復元には困難があるといえます。現地保存事例から学ぶことは多いように思えます。(会報担当 中村まさあき)

福岡県八女市「ひふみよ橋」 「宮ヶ原橋」改修へ

2012(平成24)年7月の九州北部暴雨で被災した福岡県八女市の「宮ヶ原橋」は応急修復がなされ歩行者専用として通行ができるようになっていたが、今年8月1日改修計画が決まった。

被災時の流量を安全に流すため、河川を拡幅し、宮ヶ原橋の右岸側に中之島(中州)を設け、その向こうに分水路と新しい橋を設ける。橋を約30%延伸するかたちで、宮ヶ原橋は現位置に保存されることになった。

完成は2年後の16(同28)年の予定で、当面は河川拡幅に必要な用地の買収が進められる。

星野川には明治から大正期にかけて、上流から順に1・2・3・4連のアーチ橋が架けられ、「ひふみよ橋」と呼ばれ親しまれてきた。1922(大正11)年架橋の4連アーチ、宮ヶ原橋は2年前の豪雨で勾欄(こゝらん)や路面敷石、中詰め土が流出、右岸側取り付け護岸が破損した。地元住民は同年9月に「八女上陽のひふみよ橋を守る会」(久間一正会長)を結成し、市に修復、現地保存を要望していた。

宮ヶ原橋改修計画図(平面図)



※福岡県八女県土整備事務所発表の別紙より

**【お知らせ】日本の石橋を守る会 第36回大会
2015年5月16・17日に福岡県八女市で開催予定**

日本の石橋を守る会 ～石橋とその文化を大切に～

会報85号(通算) 2014(平成26)年9月9日発行

代表者 会長 甲斐利幸
事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2
通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360
HP <http://www.ishibashi-mamorukai.jp>
BBS <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/>